

山と博物館

第29巻 第3号

1984年3月25日

大町山岳博物館



豪雪の中での仁科神明宮作始めの神事(3月15日)

アナログの方がいい

前号のコラムで内川さんが「春近し」にコンピュータの発達と、それに伴う逆説的な人間の価値感の喪失を嘆かれていたが、全く同感である。

むかし、チャンバラや西部劇の映画を、親と一緒に観に行っていた子供たちが、スクリーンに出てくる人物を指さし「父ちゃん、あれはいい方かい、悪い方かい」とさかんに聞いているのによく出喰わした。子供は早くとこ善玉か悪玉かを区別してしまわないと、まわりくどいストーリーの運びについてゆけず、理解ができないからなのである。「裏か表か」は賭博の世界、イエスカノーかはシンガポールでの山下、パーシバル両將軍のやりとりの一幕だった。二者択一というのは非常に明解ではあるが、反面おそろしい結果をみることもあると覚えた。前出のコンピュータは物をビット(0か1)に置き換えてはじめるのが原理で、電圧の高低か磁力の有無で、異なる二つの状態を区別してしまうのはご存知のところ、しかもこれがデジタル(文字表示)によって表されると、決定的に処理されてしまう。デジタル方式は時計をはじめ、あらゆる分野に進出している。いま映像も音響もその恩恵に浴するところ大である。

むかしから中庸という言葉がある。0でも1でもない、その中間で一方に偏らないことで、曖昧ではあるが意味深長であり、感覚的である。ところでしたたかに降った今冬の雪の中でも、この季節ともなれば、春の気配を充分に感じられる。この感覚は微細で、可変で、二者択一のデジタルには及ばない領域である。四季のうつろい、食べ物の味、人間の喜怒哀楽など、アナログ的存在ではないだろうか。そういえば腕時計にしてもデジタルよりアナログの方が時の間隔を見るのに便利だ。長短の針には表情もあるし詩もある。

(山岳博物館協議会委員 山本携拳)

登山ア・ラ・カルト

福与邦夫

1、山での会話

○終戦直後に穂高の山頂に自力で山小屋を建設したK氏(「穂高を愛して二十年」所載)のもとで働く機会を得た。山小屋の耐用年数は精々二十年、小屋を改築することになった昭和四十年頃のことである。フルシーズン働いた。K氏の口ぐせは「こりや驚いたわねえ。こりや驚いた。朝起きる早々からこれが飛び出す。そのうち小屋中にこのセリフが流行し出し何を言うにも「こりや...」となり言う方も聞かぬ日々となった。笑いは生活の潤滑油。この他にも多くの新語が自然発生、例えばカラス(真つ黒な青年)パツハ(音楽好き)



全国高校登山大会 県予選開会式

のK氏)文部大臣(教員志望の小生)早合点(あわて屋)等々。中でも三食のたびにK氏が欲しかった大根おろしに誰いともなく「夜も日も明けず」なる別名がついたのは傑作今でもよくこれらのことばを思い出す。○ヒマラヤへまた出かけようとしているT氏が奥さんに対して言ったことは、「君とは十五年のつき合いだが、山とはもう三十年のつき合いになるからね。」(このあと奥さんがどう答えたかは本に記述なし)

成熟(人格・経歴)した山男の、キラリと光ることばとして印象深い。○チヨゴリ(花嫁の意、七六五四!!)の輝く初登頂まであと数日と迫った京大隊の会話。A「花嫁は足で踏むものではないね。手でやさしく抱くものだね」 B「どういうこと?」 A「だつてブライドビーク(処女峰)だからさ」。数分後に両隊員はしつつかと両手で、難攻不落の、純白でたおやかな花嫁を抱きしめることになる。美女はついに私たちの

だ。△山岳部列伝
山へ登るくらいだからどこか変っている。私の所属していたS.A.Cの山仲間たちのことを少し述べてみたい。
△ちよつと自転車
ある時東京で山の会合が開かれることになった。それに参加すべくY部員は松本を自転車で発つていった。十時間近くかかって東京着。会が終わるとそそくさとまたそのオンボロで松本まで戻ってきた。

△何でも食べる
テントの中のローソクに飛びかう大小の虫を指でつかみそのまま

シヤムシヤ。「こりやトロの味」
「シ、これはエビだ」と言っちは一人悦に入っているF部員。不思議と腹をこわさない。とんで胃に入る虫こそいい迷惑というもの。
△山のセンスは
山も専門化してきて、縦走の得意な者、岩登りに堪能なもの、料理に腕がたつもの等いろいろであるが、S部員にはこうしたセンスがなく、ただ黙々と人の後について歩くだけ。だが、ペンを持たせると俄然他を圧倒する。例えば秋なら、「ここかしこに色替の絵の具が置かれ、一吹き風にも秋の訪れを」とくる。記録、通信のスペシャリストとして重宝がられた。登るだけが山登りではない。



登山競技 (国体)

△俺は理学部化学科
Bさんは街ではないつも上下を黒でビシッと締めて一見ダンディ。が、その衣服が年中同一だから臭いも相当なもの。ある年の冬山合宿、北風が吹きまくる稜線で、「Bさん、顔半分についている水をどらないと凍傷になりますよ」「何を言っておる。氷は本来0なのだ。この氷が俺の顔を凍傷から守ってくれているんだ」。しかしテントに着き顔面の氷がとけるとあわれ

△三年で卒業
A氏には独特の哲学がある。学校だつて三年たつと卒業するじゃないか。社会へ出てからも同じはず、というわけで二十数年の間に三つの会社へ入社してきている。この方が、一つ所に何年もいるよりずっと緊張感があつて面白い、とおっしゃる。この先もこの人生哲学を実践していくそう、困難への挑戦という意味ではアルビニズムと一脈通ずるものがありそうだ。
△山らしからざる姿
山岳部も長いと普通のスタイルにあきてくるのか、冬山ヘスーツを着込んでくる者。夏山のテントでは着物が扇子。バジヤマに着替えてシユラフ

に入る等々出て皆の笑いを誘つた。
以上思いつくままに、四角四面にものを考えないで、さりげなく自己主張をしていた面々の姿を寸描してみた。

3、登山の潮流(二例)

(1)競技登山
やまびこ(国体(長野))で試行された山岳競技が正式な採点種目となって早や五年目に入る。登山をスポーツとして位置づけて、技術や行動を採点しチームの力量、正確さ、速さ等を競おうとする。ご存知の人も多いとは思いますが、競技の概略を紹介してみたい。
(種目)
縦走 技術(歩行、幕営、装備、計画書、天気図)50点と所要時間(特 구간を決め速さ等)50を競う。
登攀 技術(登攀)30と懸垂下降)20と所要時間)50を競う。
踏査 踏査(地図上の定点確認やコース自然の観察等)50と所要時間(50)を競う
共通審査項目として服装、装備、重量(成男では60kg以上)等がありこれらの総合点で順位を判定する。
一チーム三名。成男、成女、少男、少女の四種別。今年には奈良県での開催となる。

△何でも食べる
テントの中のローソクに飛びかう大小の虫を指でつかみそのまま



フリークライム

フリークライム (Free climb) とは人工登攀器具 (ボルト・アプミ等) を登るためには使用しない、休息のために支点に荷重しない等の方法で岩を攀じろうとするものである。例えば、既に多くの人が完登した穂高岳屏風岩の大スラブルートも、フリークライムでい

然熱気を帯びてきた。フリークライム (Free climb) とは人工登攀器具 (ボルト・アプミ等) を登るためには使用しない、休息のために支点に荷重しない等の方法で岩を攀じろうとするものである。例えば、既に多くの人が完登した穂高岳屏風岩の大スラブルートも、フリークライムでい

昭和三十年代に始まったエクスパッションボルトによる人工登攀は二十数年間に日本のめばしい岩壁をルートでうめつくした。真に冒険的創作的で挑戦の名に値する未知ルートが失われたためにここ数年前までは日本の岩登りは一種の閉塞状態にあった。ところが、戸田直樹氏等によって米國ヨセミテの岩登りと思想 (フリークライム) が紹介されるや俄然熱気を帯びてきた。

(2) フリークライム (ハードフリー)

※全国高校登山大会 (インターハイ) は今年で十三回を数える。県予選は六月蝶ヶ岳で開催。上位校が全国大会へ出場する。
(審査基準)
・行動―持久性ある体力、確実な歩行―50
・生活―必要な装備、設営撤収、炊事―25
・知識―気象、地形、計画記録、救急―20
・態度―パーティシッパ、自然保護面―5
これらについて慎重に審査し順位を決める。

こうとすると現段階では誰も勝算がたらず未登のまま。フリーでいくことに目的を替えただけで日本の岩場に無数の魅力的な未登ルートがうまれ、今先鋭クライマー達の関心はここに集中しているといつてよい。
このように現在、従来の概念とは相当異なつた、ニューウェーブとも呼ぶべき登山の流れが進行している。となれば、北ア秀峰群の山岳都市大町にこのニューウェーブに対応した施設、例えば競技登山用諸コース、ウエーントレーニング器具 (場)、人工岩場等が造られ、その実践者の集まりができれば登山の一層の進展に寄与するところ大と思われる。往年の登山 (法) だけでない、現代にマッチした登山の創造が期待されるときが来ている。

4、登山とトレーニング

前述のフリークライムを志すN氏 (27才・教員) の日常のトレーニングは次の通りであるという。
① ストレッチング、②懸垂 (合計で120回) ③腹筋 (30の傾斜で計60回)、④指立て (150回)、⑤足の指立ち (6kgの重りを持つて170回)、⑥の基本日課にランニングや指の強化 (10kgの重りを手の各指でまきあげ計300回)。夜八時すぎから十一時近くまで。土、日曜日は近郊の岩場で実践トレーニング。

また、昨夏白馬村で聞いた小西政雄氏の講演の中に、訓練次第で人間の素手は30の寒さに耐えられるようになる、との体験談があった。
クライマーと呼ばれる人たちのトレーニングはおおよそこのようであるが、彼ら実践派は、無理をしない (細い筋を痛めないため) ・物足りない位にする (翌日に疲労をもちこさない) ・さぼっても気にしない (トレーニング中毒にならないため) の三点を守るようにしているという。
ともあれ、机上や室内で登山を論じることが

年代 段階	10~ 20代	30代	40代	50代
A 高い	3200m~ (2700~)	3100~ (2400~)	3000~ (2300~)	2900~ (2200~)
B やや高い	3200 2800 (2600)	3100 2700 (2400)	3000 2600 (2300~)	2900 2500 (2200~)
C 普通	2800 2400 (2300~)	2700 2300 (2100~)	2600 2200 (2000~)	2500 2100 (1900~)
D やや低い	2400 2000 (2000~)	2300 1900 (1800~)	2200 1800 (1700~)	2100 1700 (1600~)
E 低い (悪い)	2000 0 (1700~)	1900 0 (1500~)	1800 0 (1400~)	1700 0 (1300~)

は女子の値 (参考) H・クーパー「エアロピクス」(B・M社)

5、最大酸素摂取量

ある強さの運動 (登山等) をどの程度の時間コンスタントに行うことができるかはその人が運動中に体内にとり入れることのできる酸素の量 (最大) によって決まるといわれる。持久性の基礎体力を最もよく表すものさしは最大酸素摂取量であるといつてよい。では自分の最大を知るにはどうしたらよいか。体力科学者たちの長年の研究によつて十

二分間走 (最大努力で十二分間に何キロを走ることが出来るか) テストを行い、個人の酸素摂取能力を推定する方法が用いられている。運動場や平坦な道路で実測し自己評価してみることがお勧めしたい。

白銀に輝くはかな山なみを、こんな目と心で仰ぎ見ることの多い今日このごろである。
(長野県山岳総合センター専門主事)

6、山はるか

山は昔、神の王国 (Kingdom of God) であり、人々の崇拜、敬慕、尊敬の対象として仰ぎ見るものであった。山と人との結びつきの原点はここにあり、いかに時代が変わろうとこの原点は不変である。
「白馬は代馬とかやきはあれど白馬駆けゆく姿に似ずや」 (清水悟郎)。歌意は、残雪の雪形からくる代 (白) 馬なる呼称はそれとして、清浄無垢の雪を粧った頂をじいつと見ている (作者) の目には (神を乗せた) 白馬が勇敢に天を駆けていく姿に映ってくる。
白馬岳の別名、大蓮華岳という名も、昔の人々が山全体を神仏の蓮華座として仰ぎ、その山頂の奥深くに神仏の姿を見た (求めた) ことを今に語り伝えていようと思える。
そして最近、後立山という呼称について昔人々はその山々を大北地方及び住民の後ろ楯 (「かげに控えて助けてくれる人、後ろの敵から身を守る楯) として仰ぎ見ていたのではなかったかと推量するようになった。背後にどつしり控え、見守っていてくれる山。烈風、大雪等を防いでくれる強い楯。
冬季にたつぷり雪を蓄えて大小の雪渓を形成し、それはやがて雪どけけとなって田畑を潤し、秋の取り入れをより豊かにする。これも一山あればこそ。山と人との信頼感、一体感。

二分間走 (最大努力で十二分間に何キロを走ることが出来るか) テストを行い、個人の酸素摂取能力を推定する方法が用いられている。運動場や平坦な道路で実測し自己評価してみることがお勧めしたい。

春を迎える野ネズミたち

小林 峯 生

・冬をこす

三月は早春とよばれている。自然界のあらゆる生物が活発に活動を始めようとする季節でもある。温帯でも寒帯でも、冬は恒温動物にとつて厳しい季節である。恒温動物に属する野ネズミたちにとつても同じことのようにである。春を迎える野ネズミたちの活動を知るには、まず野ネズミたちがどのようにして寒さの厳しい冬の季節を過してきたかを知らねばならない。それはあらゆる動物には体温調節ができなくなる限界温度という限界温度があり、それに耐えることができなかったら、死にいたるしかならないからである。現在までに



アカネズミ

知られている限界温度のうち、ネズミたちではテンジクネズミの摂氏マイナス十五度と、ドブネズミの摂氏マイナス二十五度とがある。この結果からみると、わが国に生息する野ネズミたちにとつて、日本の冬の寒さはものかすではないようである。

冬になると節足動物(昆虫、クモ)や陸生の軟体動物(カタツムリ)などの無脊椎動物、ヘビやカエルのように変温動物として知られる脊椎動物などのすべてが姿を消し、落葉樹は葉を落し、多くの草が枯れる。冬眠することよく知られているコオモリ、ヤマネ、アナグマ、シマリス、クマなどは洞窟のなかで深い眠りにはいるが、植物を主食としているカモシカやシカ、動物を主食にしているイタチやタヌキ、キツネなどの冬眠することのない大型哺乳類にとつて、冬の寒さや積雪は餌の不足をきたすのでやっかいなものである。野ネズミたちも、一応地下のトンネルに籠って、あまり外にでてこないようになるが、彼らにとつて冬の寒さや積雪はそれほどやっかいなものではないようである。積雪はむしろかっこうな寒さよけになっている。

夏の間、地下にトンネルをほり、その中で生活しているヤチネズミやハタネズミは、冬になると、雪の下にトンネルをほり、トンネル内に、幾つかの食物貯蔵庫を設け、そこに好物の草や木の根を十分に貯え、トンネルで主に生活するようになる。彼らは無理して寒い風の吹く雪の上にて餌をさがし求める必要もない。またどんなに積雪がなくても、早春ともなれば、雪の下にうもれているイタドリやフキノトウなど、さまざまな草木の新しい芽ぶきが始まるから、容易に餌を得ること

ができ、ほかの哺乳類にとつて厳しい冬であっても、無事に過すことができるというわけである。

また、わが国に広く分布し、クリやドングリ、クルミなどの木の実を主食にしているアカネズミやヒメネズミは、秋になり木の実が熟して落ちるようになると、木の実を穴の中に貯え、厳しい冬の間の餌の不足を十分に補っている。

このようにみえてみると、わが国に生息している代表的な野ネズミたちの生活にとつて、多くの動物たちが餌を求めて活発に活動し、うかれるような春の訪ずれも、餌を探すとゆうことにおいてはそれほど変化のない季節のようである。

・春の訪ずれと繁殖

春の訪ずれとともに多くの動物たちは、まわっていったとばかりに活発な活動を始め、繁殖期に入るのが普通だが、はたして野ネズミたちはどうだろうか。先にもあげたわが国に生息する代表的な野ネズミたちを例に繁殖をみることにしよう。

ヤチネズミの繁殖は四月中旬より始まり、六月に最高潮に達し、十月までに次第におとろえるが、冬でも餌が十分あれば繁殖をつづける。一腹目の子は、その年の冬を迎える前に、繁殖して一代をつくり、翌年の春になるとまた繁殖するが、子の死亡率は高く、たいていの子は冬を迎えずに死んでしまふ。翌春の訪ずれを知ることがないようである。

ハタネズミは三月から始まり、一応九月に終るとの繁殖は三月から始まり、一応九月に終るといふが、あたたかな地方では十二月ぐらいまでみられる。

アカネズミとヒメネズミの繁殖期はほとんど同じで、普通、春と秋の二回子を産む。平地での繁殖期は春は三月から六月にかけて、秋は八月から十月にかけてである。標高の高いところでは、春の訪ずれがおそく、秋が早く訪ずれるので、晩春から秋まで子を産んで

いるようであるが、どういふわけか採集結果からみると、七月には出産がみられない。いずれの野ネズミにとつても、春の訪ずれは恋の季節の訪ずれであり、繁殖期のおとずれでもある。

・死が待ち受けている時でもある

野ネズミたちにとつて春の訪ずれは、死が待ち受けている時でもある。冬の間、腹をすかせていたキツネやタヌキ、テン、イタチ、ヘビ、フクロウ、タカなどの天敵がねらっているからである。天敵の鋭い目をくぐつて、生きのびてゆくことは、彼らにとつてはたやすいことではないであろう。

(神奈川県立博物館 専門学芸員)

博物館だより

資料寄贈ありがとうございました

- アカネズミ他17点 愛知学院大学 宮尾嶺雄
- アマガエル他4点 大町市俵町 宮田渡
- カラスガイ 1点 北安曇郡松川村 深沢慎司
- ジムグリ他1点 キノコ類 53点 大町市三日町 飯島八郎
- キノコ他2点 大町市旭町 相沢文人
- キノコ類 36点 松本市並柳 清沢由之
- 3点 大町市中原町 中村健七
- 2点 大町市平借馬 伝刀国光
- 1点 大町市神栄町 曾根原専修
- 北安曇郡白馬村 遠藤春子
- 北安曇郡池田町 太田勝一
- 大町市常盤 川上よし美

山と博物館 第29巻 第3号

発行所 長野県大町市 TEL.0265-2211

印刷所 長野県大町市俵町 大町山岳博物館

印刷所 大町市俵町 大系タイムス印刷部

定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号(長野四)一三二一九三